

---

# 雨

ヤマダゴロウ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨

### 【Nコード】

N5531A

### 【作者名】

ヤマダゴロウ

### 【あらすじ】

降水確率は70。電話をかけた私と電話を受け取った友人。

降水確率70%。

今夜は雨が降るらしい。

「ハローハローお元気ですか？僕の声は聞こえていますか？」

おどけて軽やかに受話器にそつと囁けば、軽い嘲笑が帰って来た。  
「御機嫌ようクソ野郎。その沸いた頭の中身は大丈夫ですか？」

なんて冷たい。

なんて切ない。

まったくもってたまらない。

「いきなり何の用だ？」

「べつにー」

「じゃあ何で電話なんかかけてきたんだよ。」

特に理由はないんだ。と、笑いながらいえば、あいつは怒ったような呻き声を出した。

そうだな、もし仮に何か用があるとするならば…。

「あなたの声が聞・き・た・く」

「死ね」

電話先にいる男は、心底うんざりだと。ふざけて言った俺のセリフなど、もうこれ以上聞くものかと、携帯を耳から離す気配がした。  
「ぐわーっ！！待って待って待ってっ！！俺が悪かったっ！！とりあえず話を聞いてくれっ！！」

「…なんだ？」

どうやらまだそこにいるようだ。

「よかったー。マジで切られるのかと思ったよ。」

「さっさと用件を言え。」

「…怒らない？」

少しばかり声の調子を抑え、何うように聞いてみた。

するとこいつは呆れたように息をつくのだ。

「馬鹿かお前は。既に怒ってんだろぅが。」

そぅいう事じゃないんだよ。

「…で？」

「ん？」

「何の用だ？」

すまん。親友。

どうやら俺は…。

「…悪い。ただ本当にお前の声が聞きたかっただけみたいだ。」

お元気ですか？ジェントルマン。

お元気ですわ。ありがとう。

「声も聞けたし、もういいや。」

「そうか。」

「じゃあ。」

「…。」

「…ん？」

いつにない相手の様子に違和感を感じる。

「どーしのさー？」

俺の問い掛けに、受話器の向こうから囁くような大きさを相手の声が返って来た。

「ありがとな。」

ああ本当。なんてたまらないんだ。

「これだからお前が好きなんだっ！！」

そして、いつの間にか電話は切れた。

降水確率70%。

電話が切れても、彼はずっと携帯を耳に当てていた。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

彼はただ首を振った。

「ありがとう…だとか好きだとか、こっちのセリフだったんだ。」

「へ？」

「声が聞きたかったのも俺の方で。」

「だからあいつは馬鹿なんだよ」

黒いスーツを身にまとった妹が、これまた同じく黒いスーツに身を包んだ彼に声をかけた。悲しい…というよりとても苦しそうに見えた。

降水確率は70%だ。

早く雨が振らないものか。

そしたら親友。無理しないでいい。俺の為に盛大に泣いてくれ。願いが届いたのかぽつぽつと彼の頬に水滴が当たる。

この雨が俺の涙なら、どうかあいつの涙を隠してくれ。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5531a/>

---

雨

2010年10月19日19時22分発行